

修羅と僧

一
一



著：不動心りんこ

絵：みよみよ鋼

目次

一	1
二	2
三	3
四	4
五	5
六	6
七	7
八	8
九	9
十	10
十一	11
十二	12
十三	13
十四	14
十五	15
十六	16
十七	17
十八	18
十九	19
二十	20
二十一	21
二十二	22
二十三	23
二十四	24
二十五	25
二十六	26
二十七	27
二十八	28
二十九	29
三十	30
三十一	31
三十二	32

三十三	33
三十四	34
三十五	35
三十六	36
三十七	37
三十八	38
三十九	39
四十	40
四十一	41
四十二	42
四十三	43
四十四	44
四十五	45
四十六	46
四十七	47
四十八	48
四十九	49
五十	50
五十一	51
五十二	52
五十三	53
五十四	54
五十五	55
五十六	56
五十七	57
五十八	58
五十九	59
六十	60
おわり	61

→

阿修羅が本当にあるならば
胸の内に業と因果を抱えてしまった小さな修羅を砕いてください
その御心を持って小さな修羅を正してください

二

修羅が登り始めた山は 劔のような仏の山
名も無い僧は「命がいくらあっても足りないぞ」と止めた
修羅の耳には人の声など届いていなかった
彼の真っ赤に燃える双眸は かの頂を睨んでいる

三

疲れ果てていた彼は 少し目蓋を閉じていた間に眠りに落ちた

霧の中を歩く夢を見ていた

その夢の中で 彼は自らが抱えた罪を読み上げていた

彼の目の前に魔が姿を現した

「もう良いだろう 何を真面目に考えることがある

人は皆が咎人なのだから開き直れば楽になれるぞ」

すると 彼は大声で言ってみせた

「俺は自分を苦しめてなどいない だから今更楽になろうと考える必要も無い

ちょうど今 俺は魂についた汚れを落としているところだ とても順調だ

お前が目の前に現れたのだから 間違いないだろう さあ大人しく出ていけ」

四

早朝四時出かける毎日
うら悲しい渚の叫び
非情な手打ちに悪魔の仕打ち
しかし それでもかの修羅の叫びは
東の海原を越えて
確かに届いたのだ

叫び疲れた彼は不思議なほどに長い夢を見た
幾千年の時が流れるかのような想念の世界体験
彼はその夢を書き記すために筆を手にとった

五

刃の御山を見上げた明日
生まれたからには登ると誓った
諦念の豪雨から笠が護る
欲望の闇を錫杖が退ける

手紙を書いても意味無い嘆願
罪業背負ったら登れ書破山
成長見守る神仏の温情
山頂から拝む明けの明星

六

迷わぬようにと煌々北斗
希望を持つように輝く南斗
無明の世界で溢れる暴徒
肉体船の操舵は船頭

南水平線に火の気が燃えよう
北方の枕の続編は浄土
快晴の東から浴びる陽光
ニライカナイ待つ遥かな西方

七

生と死は今ひとつの山道
自由詩は今や自由な参道
仁と礼を語り継ぐ授業
彼の地の先人が遺した儒教

畜生の姿で跳梁跋扈
餓えた想念が貪る欲望
閻魔の御前で言い訳無用
明後日はどっちだ 三つの悪道

八

確かな温情は親子の愛情
雨滴が岩を穿つ人情
生涯の絆は輝く友情
心を込めて掲げろ真情

地獄界の頭領が差し出す色情
一族阿修羅 学び取る仏性
歌声が示す真の中道
魂に物差し 日々の八正道

九

倫理を灯す小さな修行僧
阿修羅と向き合う大きな修行僧
簡単な方法じゃ到達できないと
有象無象から離れる修行法

今まで多くの困難があったろう
涙に濡れて光ったよ鉄の砲
多くの罪業蔓延る末法
それでも搦んだ歩むべき正法

十

賛美の歌が聴こえる彼方
美しい花が咲いている噂
私は眺めた想念の真ん中
かの地に咲いた悲しい花

空の彼方 山の遠く
眺めた幻 既に透過し
あなた想う相思相對相愛
東西の果てより足元懺悔

十一

阿修羅は既に疲れ果てた
己も既に叫びつくした
背負った罪業 罪滅ぼし
与える再興 野花に水を

心の方針 無明四苦八苦
阿修羅を包囲 鳴る砲で穿つ
百年の盲亀 輪廻は常に
一念三千 カルマはここに

十二

悲しみの数は怒りの数だけ
憎悪の数は欲望の数だけ
猛々しく山頂の夜明け
書破山を踏破 光を身に受け

王が涙に語り明かした
「いにしえよりこれは不変だ」
神仏の慈愛で生かされた
手紙を書かず登れ書破山

十三

地獄界の底より首をもたげ
末法の住民よ気付けよ永眠
神仏に祈る ただ捧げる
嗚呼闇に光が差し込むようにと

迷うこともあり 間違いもあり
影に手を伸ばすな 誘惑に負けるな
正業を葬り 因果里帰り
全ての苦痛は我が胸にあり

十四

夜空の果てに動かない星
時には曇り届かない愛
それでも種蒔き水をまき
正しい因果 育む美しさ

羨望 願望 失望 結構
私の胸には知足がある
片手に錫杖 掲げよ真情
自ら成長し我欲を破ろう

十五

十年前から出現混合
身代わり退却しんがり人格
偽我さんはいつも苦しそうだ
神経が高ぶり さあ暴走だ

混濁の意識に理性の放棄
最低な論理で増し続ける痛み
何度も頓服 薬剤 浄罪
僅かな倫理で歩む次の場所へ

十六

偽我さん 今までありがとう
私はもう逃げないと誓うよ
我が肉体船 船頭はここに
魂の漕ぎ手を戻す根性

あなたの提案を受け入れた
二つの歪は今やひとつ
ここからは私がこの足で歩む
成長を願って下さる あなたの良心

十七

私も前進しよう 目指す彼方に善神
覚悟の挺身により受ける光は全身に

偽我さん 今までご苦労様でした
あなたの醜態は私の集大成
あなたの進化に伴う痛みに共感
あなたの真価こそが私の大成果です

十八

ありがとう 相棒による提案承諾
これから一人の想念で歩めよ人生
大切なものを抱きしめ進め
止まるな 迷うな 倫理の光だ

偽りの俺は進まない それは何故か
倫理と信念と 愛がなきゃ当然だろう
俺はあくまでお前の身代わりなのだ
理性が脱走して荒野で煩躁するのだから

十九

暴れた今までも もうこれまで
叫んだ今までも もうこれまで
輝く明星だって もうそこまで
新たな希望をさあ抱きしめて

片手に錫杖を握り 育め愛情
掲げた真情に従い 注げよ友情
手放せ劣情 自由な魂に 差しこむ一条
見上げよ 頭上 彼方に 動かぬ星

二十

末法の到来は戦乱の時代
鳥鳴く方に咽ぶ湾岸の始末
末裔の醜態により権威は既に失われ
枯れ葉積もるような独壇場

崩壊後 空いた王座 群雄割拠
東西南北にわたる四海の波乱万丈
叡智の喪失により名を惜しむ惨状
暴君の慟哭など知らず風哭かむ戦場

二十一

父さん 母さん また会いましょう
弟よ 妹よ 親を頼むぞ
同胞よ 共に声を出そうじゃないか
今生の娑婆から髪断つ覚悟を歌おう

字を書き汗かき恥をかけば楽だ
それでも胸を張れたんだ朝焼けに
今でも夢に出る書破山は遠く
殺生の罪業を償うため向かわん

二十二

表に出ずに丞相がのさばり吠える
兵糧と兵隊 その数だけが憂いなのだ
努々忘れることなけれ丞相
我らを帰せよ 黄金の故郷へ

野心の前進に狂信の妄信
天下三分の計 散文詩
残した記録の遺灰は声も無し
群雄割拠 足跡は何処へ

二十三

草生す屍に手向ける情けの野花
望まぬ最期に走馬灯も浮かぶ残像
流れた血潮が大河を成し遂げ
大河の向かう先も全ては海原へ

両親に浴びせたいつかの暴言も
良心に背いたあの日の妄言も
勉学に励んでは田畑を耕した
いつかの抱っこが懐かしくとも
もう我が子は無いよ

二十四

君主の数だけの忠義はあれども
民のための大義は元から無いそうだ
時には雪に惑わされ 時には野路に伏して
いつしか泥濘を越えようとも価値は無し

劔は折れて矢も尽きたゆえ
もはやこれまでと短刀を持って
「命を惜しむな」誰かの教え
命の代償を誰か教えて

二十五

「君」は私が憎いだろう
無明の世界で明星を見上げ
いつかは君自身を救ってください
君にその日が来ること願ひ続けて
私は罪業を背負い 今も心静かに祈り続ける

「お前」は私の影に怯えている
あの日に怒りと共に放った歪みを憂うだろう
お前の希望も明星も願望も 私に不要なのだ
無駄だと気づいた頃に 大人しく指先で名簿を広げるのだ

二十六

主は赦しを与えた
私は怒りを忘れた頃だった
かつての阿修羅は眠りにつき
己の想念の中心に真我と共に安寧を説く

「お前」は未だに苦しかろう
かつての無明の文字遊びに焼かれた頃
幻の私と決闘して血を流し
尽きない後悔に怯えて懺悔を知る

二十七

いつもの風景に見出す変わらぬ恩恵
一年の歳月が教えてくれた苦痛の正体
しかめつつらが浮かべた応答によれば
乗り越える姿こそが王道だそうだ

八正道を心の物差しとして村に暮らす
蔓延る欲望に近寄れば心に魔が差すからだ
神仏が痛みを取り去った時 ひとつの教えを得る
辛苦の根源はいつも いつも 常に我が胸中だ

二十八

虚無を薪代わりに火を起こしても言動が蒙昧だ
火葬を最後にお前はもう居ないというのに
あたかも他者に存在を託し 言論を植え付けても
新たに修行に言動を磨き続けた修羅の背後に
お前の焔は存在しないのだ

やかましい雑踏に対して抜刀する必要は無い
閻魔が見送るその葛藤は報われる
地獄の囚人ならば止まない争いもありふれた场景だ
牢獄に自ら鎖を繋ぎ続けても その怒りは胸中に留まる

二十九

お前は未だに燃えているのだろうが
背中の阿修羅が吠えている事に気付いているだろうか
二日の結末により後始末をしたつもりなのだろう
落ち込みながら寡黙に仲間を巻き込む姿に
魔の合いの手によりお前の罪業を誘発する
これが因果である

春の一期により過ぎた事と私は知る
皆のあの日の笑顔は未だ変わら無いが
私が既に変わったのだ
秋の星により報われた事を始めとして
逆襲の想念が空しい白昼夢なのだと 正念に刻んだ

三十

かぶる編み笠と纏う袈裟
握った錫杖に確かな信条
固く結んだ正念と正定
閉ざした瞼に明けの明星

ふとした瞬間に暴れる修羅
積み上げ全霊このカルマ
ボサッターの慈愛にただ涙する
八正道で歩む中道

三十一

孤独を埋める魔法を手にしたのだろう
代償はより深い孤独であることを学ぶ
ますます陥る無明の坩堝だとしても
これでは亡者の思うつぼではないか

善意の皮をかぶった未熟な執念を手放した
肩の荷が下りた 心が楽になった 軽くなった
歌ってみようか 百舌鳥の歌さえも嬉しく思う
私が綴り続けた千句に想念を記す

三十二

春の一期に喚く臆犬は惨めではないか
想念と同じ姿なのだろう
白目をむいた犬の顔こそが 畜生道のありのままである
怒りを用いた交渉術を愛用し やがて愛想が尽きるだろう
私は三歩先を征く自由詩の鉄鎚を我が想念に打ち込む
頂点から眺めた星満ちる空 その美しさを綴り続けた
文読む月夜の彼方に届き 歎呼の声を呼び起こし
その時に私は報われた

三十三

燃え滾る阿修羅に向き合う時ではないのか
逃げる事無く 雑音を排他し 三步後ろの眼差しを持って
失うことへの執着よりも手放すことだ
私は何も強制していない
読むも読まぬもその者の自由である ただ因果があるのだ
お前の執着が生み出す黒い想念が
お前の胸ぐらを掴み震えている
時に腹を立てた事もあった
追撃の獣が主人のために 自らの嫉妬を守るために嘯みついた
良いのだ 食べたければ食べなさい 攻撃したければ攻撃しなさい
争いたければ争いなさい それもあなたが背負った因果なのだから

三十四

私は一年の時間を注いだ 偽我との対話に
彼にも確かな成長があった
感情を吐露している者共を荒野に放て 追わなくて良いのだ
私は新天地へと歩み続ける定めにある

悔しさ混じりに潤む眦
それでも前に進む闘志
消えゆく同志も問題は無い
同胞と描き実現させた動詞こそが現実なのだ

三十五

幼子が焚き火で泣いている
煙に巻かれて泣いている
真っ黒な想念で蘇る怪物にさらわれて
倫理無き大人達によって歪みを学び
やがて自らの道を問いただす
想念との対話 自らとの対面 己との和解は困難だろう
しかし ひとつ救いがある
その道に入り込む邪魔者はいないのだ
幼子は自らの一生を全うしている
安心しなさい

三十六

空を焦がすような空襲警報が
父さんと母さんの両手は何処
砲火の音に気付いた そうか 戦時下だった
三人の兄弟も戦場に向かったのだから

三十七

一人の坊さんが祈りを捧げた
数多の苦悩が空を流れた
地獄の頭領が再臨する時
光明の後ろは無明の坩堝だと気付け

手を伸ばす悪魔が差し出す欲望
「忍び寄る邪道に外道を断ち切るために抜刀しろ」
倫理の根源 輪廻の証明
魔を振り切ったあなたの証言

三十八

獣の乱交 まかり通る様に跳梁跋扈
倫理が無いのか蓋すらできない
数多の愚行の理由は底なしの欲望
骨の無い者達が骨の話ばかりしているのだから

道理が無い者よ
獄中から手紙を書くよりも 書破山を目指しなさい

三十九

騒ぐことで困んだのだろうが 憂う結果に病めるのだ
その輪廻に盲目と化した者達のが蠢いている
立ち止まり仰ぎ見て ひとつ輝く星を探る
明星に気付くかは全てお前次第だ

四十

心の方針は正道に決めている
風吹く方より気の向く方なのだ
光明を目指して踏み込む方法は論じるよりも実学
いつかは帰らむ 仏国土へと

六道輪廻はありがたいが
まずはこの今生を最期の日まで生きようではないか
同胞達と砂浜を歩み かつて叫びを投げ込んだ海原に会釈しよう
東に輝いたあの星が 迷いを振り切るきっかけであった

四十一

今日から明日へ夢を見ようではないか

確かな一歩に信念を持ったならば挑むのみだ

周りの視線は相対評価だが 失敗を笑う者は臆病者だ

因果の応報は絶対評価なのだから 天命に身を委ねて人事を尽くす

四十二

今の世界も死後の世界も違いは無いと気づく
違おうと論じる者の声に耳は傾けない
山びこは雑音を返さない
解答が無い世界だとしても理はあるのだから
定命の時間帯は無明の想念に囚われてもおかしくはない
それでも輝いているのではないか 気づく頃だろう

左腕や右半身が麻痺したとしても これも私が背負った罪業
因果による裁きなのだ 私はこれを受け入れよう
それでも私は生かされた 命を残して頂いた
「生きろ」と天の一言
「生まれ変わった気分はどうだ」と父の真心
一度は迷った 逃げたかった
天の御灸は良く効いた
この境地に至れたことが実学であり 今では生きる喜びだ

四十三

星が流れ 天も震えた
川が流れ 御山も泣いた
稲穂が実った 人々が分かち合った
全てが過去だとしても
永久の鉛筆で記された平和の散文詩なのだ

一世紀の月日が流れ 人々は忘れ去ったとしても
天地の理は揺るがず かつての争いは神仏が見守り
全ての兵に至るまで苦痛を汲み取ってくださり
救うことを本願としてくださった

四十四

蛍の様に短く輝く
蛍の様に自ら照らす
命は一瞬で生まれて一周して
最期も一瞬である

六道輪廻か潮騒か
生きる喜びは歓喜の歌だ
照らした銀河の色は濃く
照らされた人間は罪が深い

四十五

今だからこそ我々が生きている証を打ち立てよう
刻んだ記憶を分け合う友達
小さな飴玉が一生の味となった
明日は来ないが 不思議と未練は無い

四十六

中身と実績ましてや倫理までもが欠落してはいけない
仲間と呼べどもいかにも孤独ではないか
無い物を欲しがり会議に参加したところで
耳障り極まり聞きたくも無いのだ 関心は向かない

楽して名声を簡単に真似しようと 道化になり果てるのか
欲望に上手に溺れる不始末
因果は自らばら撒く種子である
結末は粗末な処方の残骸だろう

四十七

八正道は無く光も照らさず
曖昧な輪郭の前後さえも未確認ではないか
誤魔化した所で妖には智慧は無し
眉唾の知恵を鵜呑みにしては末法だ

今更遅い 仲間想いの顔をした時刻の三分前を
白い眼で観察された気分はどうだ
焦らなくて良い
因果は反省によって自ら学ぶことで実を結ぶ
応報に省みない姿勢は 自ずと息苦しさを生み出す

器に非ず 器が足りず
受け取る采配さえも奈落に落ちる

四十八

同胞の事が大切だと腹を割って言って見せなさい
自己保存および利己主義の末路を知らないなら 道の続きは三步先だ
虚無を伴侶としなさい 学び取れることがあるなら生かしなさい
自らの成長を妨げる者が 鏡に映ったその時に笑いなさい

甘言をばら撒いてはならない
八方に論客を迎えたところで
阿修羅の古戦場を迎えて八方塞がりなのだから
感情 想念 責任に盲目と化す因果の判断 自我我欲に酔いしれては
色情魔が騒ぐ一晩に帰結して 明日は同じ事の繰り返し

四十九

あなたが生まれた 何かが起きた
ラの音が産声であり 天が喜ぶ
あなたが生きた 田路と街並み
兄弟が静かに響かせた足並み

一緒に縁日 分けた綿あめ
遠くさざ波を聴く防波堤
小さなものを守る不思議な誉れ
二人で歩く 近い背の丈

五十

家族を抱っこしたならば それは重いだろう
命の温もりを確かに学ぼう
喧嘩をしたなら赦しを歩もう
仲直りしたら一緒に遊ぼう

素直になれない過ちもあるさ
すぐに気づけない未熟な私だ
落陽目指す迷う判断
家族に謝る十時決断

五十一

思い出すカルマ あの日がいつか
騒ぎ出す悪魔 いつかの失敗が
泣き出す母さん 今も鮮明だ
引き止める父さん あの日のまま

かつての家族は三人兄弟
当時の人生は俺の課題
全てを投げ捨て懺悔の知
思い出す日々 悲しい気持ち

五十二

修正が効いた思春期
二人で眺めた古い映写機
目指した将来は熱い俳優に
夢語るお前の笑顔に安堵の日々

虫の歌声が豊かな夜半の秋
真っ白な冬のお化粧に踏み煩い
春の訪れには恋を煩い
向日葵が咲く頃 家族よ永久に

五十三

見えない歪み 家族失格
燃え盛る阿修羅 兄弟が怯え
壁に穴を開け ガラスを割った
効かない錠剤 届かぬ浄罪

家族は困惑 私は出ていく
皆が止める 私は荒れ狂う
最後の良心 君の泣き顔が
最期の日まで 焼き付くだろうな

五十四

輝く毎日が太陽の下
歓呼の声も高くこだました
あの日の輪廻は俺の罪業だ
家族に詫びても 既に詫びきれない

生まれ変わった優しい家庭
何不自由ない孤独な日々よ
俺を赦してと慈悲を願い
振り切る右手 繋ぐ魔の合いの手

五十五

弟の姿が今じゃ見えない
姉貴の姿も今じゃ曖昧
実家を飛び出し魔の界限
服を掴んだ弟の声音

「お願い兄ちゃん まだ間に合う」
「このままじゃ一生の傷を背負うよ」
「僕達家族が離れ離れだ」
良心を無視して 未だに後悔

五十六

生きてる末法から目指す浄土
西から東へ 東から西へ
皆が目指してる筈だった仏国土
語り部は私

冴えている技法はきっと見つからない
町から道へ 山から海へ
かつての修羅道が今じゃ参道だ
足りない経験と問われたら それこそが私

五十七

新しい出会いはきっとすれ違い
文化も倫理も無い砂漠に
その事実を踏まえた上で自らを奮い起こし
種まき水まき 時には空を拝み祈ろう
偽りと美しい姿は鏡に映らないのだから

五十八

広大な砂漠を進み続ける兵士達がありました
彼らの人数は丁度三千人です
皆が抱える水筒は 既に水が残り少ないことが明らかでした

一人の兵士が音も無く倒れました
彼の水筒はもう空っぽになっています
すると 他の兵士が何も言わずに駆け寄りました
彼は倒れた仲間の水筒に水を分け与えました
その姿を見た他の同胞達も 何も言わずに列を成して
力尽きようとしていた仲間の水筒に 貴重な水を注ぎました
そして 皆で力を合わせて抱き起し 再び歩むのです

「誰一人欠ける事無く この砂漠を皆で踏破しよう」
この誓いを人は何と呼ぶのでしょうか
彼らの姿に泥を塗る者はいるのでしょうか

五十九

天よ

私が激しい怒りを抱えた時には
赦しの大切さを学ばせてください
私の知る誰かが不幸になった時には
慈悲の心を学ばせてください
私の知る誰かが幸せになった時には
共に歓呼の声を上げさせてください
私が悲しみに沈み涙を飲む時には
私に最低限のものを与えてください
私が最愛の者と手を繋ぎ笑えるように
その御心で見守ってください

六十

運河を境界線として両陣営が睨み合う。
私は東側の歩哨になったばかり。歩哨の務めが始まったのは三週間ほど前だった。
寒風に抱かれ、流れる水の音に耳を澄ませていれば、幾分か心も穏やかなものだが……。
しかし残酷なことに、ここは冬の里ではない。銃音が鳴り響き、断末魔が上がるのが
当たり前だ。

生きて実家に帰れるとは、私の考えにはなかった。この内戦が始まってから、ずっと。
こうしてまた太陽が昇る。ああ、太陽は眩しいというのに、心が安らぐことは無い。
吐く息は白いままだ。

運河の向こう。敵の歩哨が小銃を手に睨む。
私も着剣した小銃を手に、流れの向こうを見張っている。いつもと同じ眺めだ。
『あなたが撃たなければ、私も撃たない』
戦場では珍しくも無い不文律。戦闘の時以外は、お互いに流血を最小にしたいという
思いもどこかにあるのだろう。
その日の昼飯時だった。相手が大声で「今日は焼いた芋だ」と、こちらに聞こえる様
に言った。

私はその無邪気さに、子供の頃にも覚えがある温もりに包まれた。
緊張が解けてついつい口元を綻ばせた私は、
「今日は私の誕生日なんだ。やっと炊いた飯が食えるんだ」
大声で応じた私は、遮蔽物にしている瓦礫の裏から、こっそりと顔を出した。
すると、運河の向こうの彼らは塹壕から身を乗り出して、拍手をしてくれた。
五名の兵士達が略帽を手に持って大きく振り、親友の誕生日を祝うように喜んでいる。
「天に感謝を。誕生日おめでとう」
ただ、ただ、嬉し涙が止まらなかった。

おわり



6 f 7 c 5 c d 6 f 0 6 2 1 e 96.png

詩集 修羅と僧 二

著 不動心りんご
著 みやみやみや鋼

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
